都羅多弥

伍

4409
5

特
へ2
4409
5

水安渠川

南永康子冬十月、趨于京師、至歷掖州、而過水安渠川、在于山城國界也、流源尋涯、乃入溪澗、巖巒崢嶸、拔樹參天、其間與松風和應、澎湃潺湲、若奏鼓吹、百步水涉、涓涓石出、泝洄入出、曾莫能窮、忽見下流、而溪邊林間、出茅茨數間屋、屋外餘地、可容倏徇、溪邊以灌田野矣、於是始覺、水源潛地中、及于此復湧出乎、從文云、水脉行地中、蓋此類也、嘗考芒仙一言、百載于古人之詠、清心洗鮮、而古趣自了、況因以陸之二章、

帝國圖書館藏

河の足氏那賀郡乃名を比波か郡志摩美雅世孫河内
西の豆庭浦伎の母、
敏南の宋八毛之西若狭湾紀伊国伊我波部豊仁文安紀
乃ふ宮市か与へ数、

郡屋面郷

伊芸渓のあよくあつまりて鈴をふてみるまら、
其鈴蒙水ゝ云文のゆゝ揺れる、
風儀通云郡司屋飢ふ宮を不得衣一仆ふ取法人多
過婢飯面郷屋下戸毎行飲水常ニ授一銭井中ニ
むゝ飢て拍りゝぐ年ゝ乞れど行の中れぐわぶに

ゝゝ屋れゝもひもわびゝゝもわぶゝゝぐ乞ゝまゝて塵ひ
ゝぶに世ゝゝとむぐゝゝの八氏八郡氏ゝて石を屋ゝゝむ
ゝて語ゝゝぬ祝れゝゝゝれなわゝわ姉ひゝゝわゝふう
ゝの宮れの人れめゝてゝゝふなんゝゝ俗ゝゝわ田圃文く
領ゝ門ゝゝあのゝあゝゝゝゝつゝひゝいゝ眠ゝゝしゝわけ
ゝゝれゝど屋なゝゝ人おのれいふゝひなゝく爪くゝゝゝゝゝ
ハわゝねゝ夢ゝいゝゝもゝふゝゝゝゝしゝせゝわゝゝわ、
あね宮ゝゝゝのゝふゝわあのゝゝ一人彩ゆふ弟ゝゝ杉ゝゝ文
浦ゝ宮ゝゝゝゝぬゝゝゝゝゝ母ゝ屋ゝゝゝの杉ゝゝゝの心ひ
ゝゝゝゝゝわゝねゝけゝ伎ゝゝゝゝゝ

ばらばらのごとけものしに拾いぶくきて後世の
ろくよ
ろくせてらくろくあのあれもらぶめぐれいぶともろぐなく、
ろのーうわぶーわぐーひょろわかど人拙くまろう便ろと
むーひょろわいとうれーうてふわわてなるとろろの我わ
ゆーいろていまくく年月のくぐぶぐろぶぐくくひくろの
ろろくいるで吋くゆくんぶるくくのくてなろるとめるぐ
もあくくーくくくくいにまれるくるものくくよ
ゆらぐろくぐゆわたゆるもんよいとうれくくれいらい
けゆろものくぶがいろくぶるいむつーうれどゆうれと
わぶーめぐくてわひくくんやうをもろろぐてうれくく、

五ノ二

あるぐおよわうくちまて世よ柿人ころ人せられ流いぐで
糸くせざろ問ろをゆろわぬくぐくいれのたぐぐいぐくくい
くぐのおぐうもあくぐくれるくと吋くゆくるゆあくく柏
ちわと人の義むをいろやの志びるはやぬあひなうくふぐ
くくいくとものぐくくいく拙ゆなびれんそのくくの若くくう
承つれををくろわぐ流ぐくみぐ糸わををせぐいろのくくふ
くやくいい、色ううくくくもめくくあ我をゆわくれいいれるくく
くも杉ゆくちれゆ盛のくぐれよくれわれ光をくのよ
んよわ分の財ていくぐやくくくる伝素とのくかくく
くく人の渋ぐろわくゆくものくく別、異ゆねぐ出くくのけ

てゝなくて千ちとをゆゝしどもゝ経さゝとまゐあゝち
さゝをゝくのゝみてゆゝるゝふゝるゝゝいよゝよゝそしあゞ
仏ゝを宮ゝを祝じゝのゝづゝきゝまゝるゝよゝゆゝくゝみゝしゝまゝるゝわ
て、祝ゝはゝゝ父ゝのゝわゝ位ゝふゝわゝゝ彩ゝゝゝるゝわゝゝいゝの会宴ゝゝゝゝゝ町を
つゝるゝわゝゝゝゝあゝれゝんゝゆゝる行ゝれゝ紫ゝみゝの沉ゝまゝで八ゝはゝのゝ田ゝぞゝる
よ餅ゝど米ぬあゝしゝがゝちゝに老ゝを北ゝれゝゝゝゝおゝぞゝちゝびゝゝゝわゝるゝわゝい
づゝるゝを位ゝを人ゝ殺ゝれゝゝゝとゝども八ゝまゝどゝめゝるゝゝゝゝみゝつゝゝゝを
むゝはゝひゝきゝまゝるゝのゝらゝにゝうゝちゝくゝゝゝゝゝ

じなわ、ふんむねしーきこえ伊わて、のあなるさ
でまうんで伊ることゝ、ゝ廿のふぶさてるこ一伊ん、いゝこゝる
めーさて、うーこゝる彷わびゝこんぶ伊なし、きゝらゝこゝよゝで
伊ゝんせうこれわうーろこゝせのふこんぶぎーのいゝこゝる
ゝじけれかさと拾ばみゝて社よいえもはゝみあゝぶ伊ゝる
てゝつゝ立て出づ時考あしか、我拾りふなのゝぶをも拾ぶゝぬ
ゑに伊のゝこゝもきゝこゝえゝるゝのふぶゝもきうら廿、あゝるゝも糸あひ
てゝこゝいゝゝるゝまゝぶや、きわゝぶゝこゝ拾ゝなひゝぶものゝつゝくれ伊
せてゝやゝて考ゝえゝくゝそゝるゝをゝわゝるのゆいゝるゝぶやゝひゝふゝ放
ちゝんゝとゝゝるゝえゝて門ゝ差ゝわゝる婦ゝえゝいゝゝゝゝをなゝげゝよゝ伊ゝゝ

ゝ一和の蓋ゝゝゝゝ

古戦場

金心尼、我殺波れやぐわとひまてのうわなのごとくもちた
とへ、をいのまうしひとろぐ〻拾ひいひてきのせかくと
云ふをもちぐ〻抱わきよハ仏ごとをとれかび出ぐく
をふのゑ葉野の原をもれぐ〻こんを国新きをく廣め
つれをうんをのうを無こめてあるよハ心をゆうぐろてよ
とも何れよほひやあんうれを年のをるあるぬのうれ
なぐう耳をわるわしあれがちれをとを今おぐいで
うをを為めまうバやれぐろをみつをろうこんれい
よ一つの戦の場をとうていとうの形者なるこのいうよ

へうぐまんをよおうをめんをよをぬをうぐ〻
ゆ和まぐをうをれうを多のわうれがうぐんをうを受びて
ゆをうをせをへと云あれをぐ〻うれハ拳ろ滝のをを代う
なぐをうよハ拾をれあるわるを世れ乱をれぐ〻をうて歩
も出〻め治まれる世れ民をのをうををげぐをうをひる
行いるぐをあらぐ〻てをのあるわれるうをうを
ぬハ何れ藤もあぐ〻ぐろうをあぐ〻〻をれわぐを
をう〻ぐをう離れぐひよ元ゆぬをうをのをわ出て
なぐをめんよハとて拾よわうをうをうをぐ〻
をうぐをわ出をるいをおぐをうをれぐれ

昔、こづ屋のこ、雅波の大塚ゆきこよ居加へられてまうの
がわのひ、吹信濃の国、ふきもちうれ来らいみ彩をうてよま
さるひ、妻、

ものこ、ふのまむそうぐねをかわて、秋風吹し桔梗のそう
ひ妻、かぎの花れよ、ほめきせしのぐ反坂の中よハいと
かうれあうれるのうわあひ伊わき、其野ちや人のうか
を今掛ぼし乳ハバ、ぐわもなくひろらなの彩也、あれうう
の大木種、小岐ゆれ岩を越て、野よハくぶわ来ちのわ東ハ、
源氏、和田、風ぐ、源氏の岩、ゆ立つぐきちうぐ、うれがあ
まりの山、岩、立続ゆうよハゆくきくあれてよりの、

沼のあわてうゆしバさ、ぐうわの原野ちもわぐちあぬなうぐ
し、夜ち秋風ち立て、篠ぐくゆきぐわようひちうちも葛
のうくみ切りてくちやぐうろ、岩八伊笠ちせなぐうづく
ちみぶれしよ八をゆくくれ、弓末のこうんうぐれしてち
うぐ馬れ行くくをまぬ弱れ籠よ立源伊ちなの人男女越
後、国れまちくふのうひちう場よて籠きし物八今
うちうきくわのうえぐなびくよ伊て、ちかうちうぐ及れ乳
八尾花ちぐのやうわちちびく大ぶえ笛のち八、あわうくく
めぐ、だくち虫の彩くぶわうち風のちう仇ぐうつ鼓ふく
ちまぐひぐ、めべちけのハうれうよちうちうわあちハ又

うしろをうちて追ふうちよりれあたりめらびゝ始をうく
ハ深らうらゝみのちるもあゝぞうゝみる花のさきのわゝこ
ちゝのけまわゝんとほゝわ奈れるゝれをぞまゝぎまゝぞな
らるゝうゝあれ流るゝ血ハいまゝ川とせのれ砕ゝる骨ハさ
げれもおみちめゝぐゝ手みわゝん後ハ代あゝの
ねの五れ下ふゝとゝぐ屍れ枝ゝぐゝうんがよるゝうと、
ふゝ杉ゝハ分れ元をもつめゝき汗ハ衣をとかゝぐゝ、
うゝまゝどひゝてハ霧京空月の野よ放うゝ約のいかゝゝをと
駕ゝれゝぐゝゝ獄れるあゝきのゝよ流るゝ星れゆゝくゝを鬼
れ次ゝるゝのれゝうれゝりてゆゝ手やをゝゝ方やなゝおゝ

まゝぐふをゝをゝゝづめてゆゝハ我其仇ゝがれをゝゝをと
をゝうゝむゝゝよゝあゝゝゝ天竺の御垣れ内ゝ國也ともいゝづゝ
の玉ゝゝ人の骨れゝうゝゝれゝれゝゝん手をゝ手をゝまゝくゝわ
てハゝ手のあゝゝ小田をゝをゝゝゝゝゝゝ千町のれゝくてゝのわをゝ
むゝをゝゝ男をゝをゝめのゝゝゝれゝまゝみをゝひゝゝわゝをゝれゝいみ
ゝゝをゝれゝゝゝまゝゝゝゝわゝゝゝめ今をゝのゝのゝわゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ人ハ若ゝゝゝゝゝゝゝめゝをゝゝれ、あゝゝいみゝゝ若ゝゝく
ゝゝゝ就ハ、
ゝゝゝゝゝゝゝ信濃の國ハ山ゆゝゝゝ野ゆゝゝゝゝゝゝゝゝ

人も、あゝ極のふけびをゝびて、人をとゞ家庭(ヤシキ)より人の
元八杉のぶやつゝと、仇なる人び怪ことをもゝ大きの色さ
部(ヒヒ)ゝてゝれぶこのぶぞふとバいて、釈もみものなゝもめ
をも、うけ皆ふぬざつるぶめいゝわ技のうゝわ石もぞ、
叙大方和ゝもゝわ寝て、夜世のゝもゝ寄つるで、ゝをわゝ
を、及をゝのぶ戦れ場(ニハ)より死をゝ武ゝ古れ浦の石をゝ
ゝゝ年れ世ゝでよ、うゝわ次いひづゝゝ戦ひをゝ八、
ゝもゝ人を、ゝつちのゝぶゝあゝねバいゝ極ゝて人の
ゝもゝも野らの、ゝ堅ゝ寄ゝ年ゝゝ歳の義てゝく
ぶけて後ゝんやを、

及歌

千ゝやぶる人をゝふを馬ゝ寄せて、あゝ野の末ゝ日すゝの
ふぶゝゝぬ

篝ふゝゝてつゝれめてをゝちゝの伝ゝゝる野ゝ月をゝ
わゝゝ

後の名をゝのゝゝてぶバゝをゝの命ゝ風の義ゝ
なゝゝめや

聴雪

あゝれゝ光ゝゝ人ゝゝのわゝぶゝゝゝ技ゝゝゝゝのハあ
らぬ、昔ゝ部ゝの雪いゝなゝゝ風ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夕べは生やくまの一など思ひもよらぬことなれば
とまりてこの中をせぎうわいの一べ〜れやどるもうめて
行つまるぬる時ぞでもむ月うれの日雪いとふかう降つゝ
るを待よろこぶる友どもふりみたるのいつゝねてもえ
ぬてまでも野山よりあゞわ一ふぐまのふれかわうれぬを
かうもおいうくのわれ部を雪のふるまゝにせよら降れ翁
れよみてもちられわ一又小海の翁のいうるのがやつんぐて
うゑてうゑれちゝせ花よりわもしかう庭れ松のち〜雪
うれかんいひをうしれ一のべ　ちゝちう風のなぐれのあ
やしまは色目の花の林おわうわふ一やうし一などわ

しゆうる今は用ところうれ足〜そおうるれこの海雪より物
ちうわいちんとて紙をぐうう出れど指は亀れぐるよ
うふまわて爺あゆまうくをあうねばわを火ようるをぐ
まうてこ一うをもものべ今をもあげまそは色いのくわと
うれかんいとうのれし一ゆ神月月ふれるよ深一本まれおう
て〜後は野山は美なるおわんてちゝいやしきわのが行ぐ
かゞらは冬ぐうわしてまをゆうわをうれあ一ふまわぐ
けしまう風はげしまはやもうう窓れ紙は風を殺わて いと
いうう雪さうゆゞけて雪やりのう夫物のをふつるうゝた
まし一ゆゞまらしてと鬼れあゆみてうゝまうえうは雪のみ

ずしくうとまひ出て小の宮さゝ〻ゆてゐるしばらくなく雁
をゝゝ〻ゆゑ小藻の松ゞ枝の葉ゆゑいとゝもろう海つゝゐるを
ゐるゐるものもいでいつのでゝ出やゐゐゝさゝ枝はさゐる立つゝなる
ゆゝゝちさゝゐゝるゆかゝらつゝき入ひゝゝさゝゐ枝ゐゝゝゝれゐる
ゝゝゝまゝゝてゆゐゐゐひ立ゐゝゐゝゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
のゝゐゆよゝゝゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

情をしらぬ人にあらし地をこうまで居うまわぬれば
こ巖とこそいわるる下まうづりれて玄立ぞもおぼ一ぎ
ぬ三越路の山里人ぞ我ハ

其二

厚ぐもの冠をしもこめる越の國こそ冬の雪れふと
ちわるこいちはこそわ深さ谷ち立となわ乱ちき木素ちこの
ぜ雪ふい堅れ或ハ崩れなぶれて掘り人の業ちちわて光
る駒をくちちろくこそなふるわるわ郭ぬるこ
へあるるなのわそといまの一人のおげちくハられば炬をも
なわハわ宮ぐの雪ハ生ぐれふるうんな自ちて風ひや

ちハ雪ぐがちれるるハ終ちるひるれ照日なぐるよ薮ちひて
永宮しもといひつもこ生てちれぐ高山端山なぐて赤ち
ぐうるちるなるく野ハちつ地ちうあれ下ぬ草ぜ一小草
ちれるるてくれる砕うれ風の蓋ちゆくおくちるるひい
ち稗ふちこゆるふ川のせもち流ぐ水とぐる流のちくやる
るぶいるもせぐ野流の小川のちぐれもちぐるみも風ちふるる
ちるちれて池沼ハちれ水ちやるちぐちるぐちくちるくる氷
とちハぐくくあめるこちつちを殺ひて流つむなぐあれ
ちるくくちの雪ちるくくあるの雪ちるくくあるの雪ちるくくあるの
の年なるちるちるるる月立て空のはぐるまでちるくハちる

たゝぶ波つゝてあれ雨ゝ石のなかめにあんなれ花さかの
ゞ対さを見ど芸八枝のしたるこゞねよゆゝあうびそ
ゝ乱む月立なけ風ハ寄さ見日彩ゝらしゝふの南
おりてよ嘉ふれゝうめて古年よわふゝみゝ梅のもみそひ
らゝき寄れ初ゝさゝやゝゝゞ彩よおゞれて笹ゝる極れ
枝八ゞよ歩ゝけゝゝれんゝのゝもゆけゝゝ高
きいやゝゝまやゝゝよゝろゝびをのゞつゝゝゝもい
きゝのひゝてゝゝれきゝ花めかのゝきよ唐ゝやまゝ孔ゝを
たゝしげよ糸世れ飛び何もゝをゞゝふゞゝなん年のち
よあうぬゝめゝ月わゝゝる雪よのゝ水ゝゝ入れのゞ対すてゝをを

いゝゝハ嘉ゝけち花を落ゝゞゝ寄れ淺をおらゝゝゝハ梅みれ分
嬢まゝゝゝゝゝゝ人のゝゝろをゝゞゝめ人れ心をゝゝゝゝ
むハなゞあめゝゝゝれゝゝ侵よ人れあやよゝれるゝゞゞもも
仍ゝゝのあゝゝんよゝけゝゝ立廻ゞなゞゝハゝゝ寄ゝゝ月、
立出てゝゝれバ、

なちめぐるみの嵐よゝぶれてちゝのみやゝれ芸のあゝ雪

庭ニ林流醫伯之需ニ撥李太白春夜宴ニ桃李園序一

やよひの空の春ゝろゝゝゝみなゞゝゝ父の者て月いと花や
ゝゝゝゝゝのゞわて庭の梅ゞ枝よえゝゝゝゝ新のゞよ芸を
あゝゝふハ仍る梅ゝゝゝゝゝゝゝゝれ也人ゝゝ未れゝゝゝハ行わ

わそ法くみあるぶ、あるぶれ面いつる、月日ハ筆あを付るる
とく人の命ハゆく水れ沢なるまるを、ようひやりてるれた
ぬるど断まるどむひまるへいちぐいるるちハいひづるよな
ぶめんや八花の男そんるやちしへるまんどてうるる事を
るるめ筆紙るるげいでい、拙求め紙なるるるるどさね云り
水とるる影るちる花るまるてるるるとゞまるぞるや我める
ハるぐまわて何ごるるれるべる年ゆ事のし水もなど
るぶるしれゞるよひの丸ぢるわ八あそハ雪るもと井まわる
へるるるるくるぶるしぶるちるる人の云酌てあるぬ八大体れ
るちるるるよれるるるよ似て言ょ丸まるるるゞ書る行るる

も昔の人なるぞ涙ハるるわあるくとるれるぐるる
なしもいへめづるるぶるわ為らじれを我先るるれう
めるるるやるるるよて、
大ハしや紙れ流水るるの和れ月をるるハるるてうれる、
酔なるせぬ人の云ひのるるぞるる水の流れ水の為本れ色
まるれ紙事雲のるいまへ今るるぞるるしめづるるるる
ぞれ去るよれるるるいるるるるれ我ハ
ゆるなるるるいるるるるわざなしれ我ハ
笑るるるる、
撫花影のやるれバ人るるのるれ枝るるにるぞるん、

翁さひたる人の、
よしさしば歌は花よゆづらんとぞ思ふ、月よ我をいざなふ、
ささぐべき酒ぞ、まろうどもねもんそ、そびやかして、
咲花のもとにまぬ我種を月よりそそぐ歌はみよつい
あちこちいとう酔ぞ、みしてはつるの初の花は未来を多なく
ぞちの風ささぬ、ばちわもちぐめど月もめのいまかまて
はをの和みぐくあれど酒の余れ老ぬうてをとぎち
うーとわ寄いとうふかわ、
この酒をかうてつし壺の中に長き月日はうとく社きけ、

ぬういまぬ人ゝはれのぐ砂ゝ御新いとうのうめわ
ぬとしてをん、

放鄉　傚韓退之送李愿歸盤谷序

一夜カ齋主翁うわて云種子曉云唐ヨ文まなし、学
韓昌黎の李愿ぐ盤谷序のこまらゝ、常
ヨ乞ヨなゝはまく思ひて、筆を止ゆ義度あ彼を
ゆうして摺てしめんとゝ、後まうさて序を穂なみこ
と年久ゝおよはは大自の芸和字あを國ぶるようあゝめ
て賜れゝを世ヨ掃ゝよ思ひて筆めゝる又芸をも其
なめ形ゝぢゆと試ゝまあゝぐしばゝをゝいかむは種子

まねぶよりほかはなしが注ゐく人よりなりぬべきこと
なるべくをあはれまるるもなくしらぬなりわざはいと
ゐむものごとなりて笑ひくわぬいと尊きもべきこと
なるわ、
むかしの人世よりの人をなりわ、時を失つるあわ其あといと
もはかなめるをと文よりもなべくあぐんが炉をしさ世よりあくら
ゐ愛をもあるべ、時をしかつるべ恩をなるもあるべ分れ
幸ひのはかくしたちいをもあひはらぬようあるめ世よ函て
わるれとる人の浸よはをしめらるもあわ樂しをる
きをしといつを求をもよはあるぬ浸ゐあるもよ掲

ゐ昔ハ聖の御代ようもあひて賢しを云人のひとわハ言
さみくるよのほわ一人ハふをひのをしをはりくだか
のほゐれるゐひあをといよをせんを世よあくゐ馬車を急よ
ゐゐろうしみうどよをかわて八つのをくのうへよをわ思
ふををあわ言を納れるあしをを恥めこのをしをの國
の汚わハ其事行なをををハふをををくをを章ひ人せひわ
ををハ家めねゐ四方れ國つ窓を庫ようをふやゐ援うゐ
をを物を銘々の笑ををしをれゆををしなをををのしをよ人
ハ見くをとのををハあるをゐでゐし恐ろしををを人思議ををハを
ををる人をあわしをやこれを夜ハのわをわゐしををで

あるてのよりうきね腹のうちまでうちうんの酬ひの
うらぞ終るあわ或ハ中ごろよりてやうしあるハ後いの
なんとつのくをやもうハくをのしくしせバ出るを愚
也とせんうゑて思ざうハ迫せ恥ぞ出ぞ
人のなりして行のほどくしをうつなわさあしかうちる
浪しなぞうらんあたのひしめそいむべくよまぞくハ
分をあやまれるよて後くをわるくをけしをせもらでうん
ものぞ又迫くべき呼をうしなひて死のうもむるを後ふる
ぜん坪よの業をれうやし南のふを終ひよ行宮みるわ
人ふいうふの中よりうわーたぶひのけぶくしをうちて

安をと楽しむ也やめしれてうのしをれがさぬ人ぐに
まぶしー我ぞ面て飢ようをれ水よりしを行ろのなわもも
いうぬハをるぶをうくわわのいをせめるをうをうおハ夫
らめ死なくて法ふのれりしろを形れ月ををてをうと獨ぐ
ちしへハれをやをるめくしうぬよハのでみをう
よ井彩のるをうもうをうめうれ谷深を彩を民ハをて
うあをぐなれてうけを行よくしを形れ特わよ物いひで
けなん八何をうをふぶくもあうぬをを郷なしバをうあ
をくくよ帰る八心を安よよ行のんの彩ひ也をうぬ國と
ふを流よゆけぶふハをうをバくしくあわうの波行ぶろ

おぐろ〜くて、そもじ人をうらんちぢろのなみしぶんよ
いいまして、ゆるう交そう〜ん、部わわこう、ふのくぐまのひ水
の流、木ぞの花、おわのづ〜〜〜やうよ、あれおもろ〜〜ぶ
めらう〜〜〜を棄ていづ〜〜よう〜〜ぶ、ちんさ、ぶ〜〜
う〜〜ぶぞ、ハぶ、やそ〜〜〜うれねぐひよたぐふかう
なわせとうれば、若さ男ぶの流うる歌ようし格ぶよき
へ、ナよふ〜〜びさぐわんうよう〜〜め、大う〜〜ハあるぐぶ
立ようひとぶめ、妻姫おのんをうつて流ともうるハ、思
ふようれふ教うそぶ〜〜うるめぬをん見らぐうをものの
ぶハ、う〜〜ぶ〜〜ぶのわ、ハ、充て後ようう思ひうう孔

ぬひろ〜〜もわ人よ〜〜〜ふんうわふ、ぶ、ぶうほぐのうぬ
りんの快ひなわ、拙学ぶハ、人よおりねるよ等し〜〜〜ぶ、つを
あわ〜〜わ田金〜て、ひなのみや〜〜いよあ〜わの人〜〜て
のわぐ〜ひ〜〜ふ〜〜むう〜〜けぐ〜〜れ変うわ部よあれぐ、花ぶ
ぐ〜〜〜あやし〜げよ杉ひ辛し〜〜ものハ、〜〜のう〜〜塊の流ふか
ふ〜〜のく〜〜〜〜〜てよう〜〜ぶひ〜〜ふ〜〜ものぶ〜〜〜〜ハ
う〜わ〜〜〜〜〜

らぞ八びらの國ふる郷の市ぢあもあ〜ど彼谷ちのまま〜
ろのちまめいきてちろ〜ちるであちれをしらんや八住
て都れわび〜ち八分のちどのちろ〜さなわ延之のみれをよ
ひくわ立ま八天のまま物つ〜めてれ行の是ゆる〜
てちわる立人れ行のちどを〜ちるるのわ出て八つの
面ぢろ八ちぢ〜ちちどしよ安んぞろ人れ樂〜ちろま
をま〜思ひちろちれるつまちちろ人ろ歌
ゐちまめぐれる谷の水をよみ木まれ花八芸秋の芸ちあ
らうひちれ夢おがらうしと泣ぐしのまづけさちよりを
八〜ろなし〜ふちあ〜ぞゆゐ傳ち谷流れ

して住民のちれや茸あく松のとまち待ふとしかく夜をれ
うまもいまで登まも田刈爺ろわ松ちよ芸果れまく
ぐ〜徇ひ行のぐのちぐれるなわちひをう〜とやあ〜ぞ
行ぬ〜ぐ色ちぐでちろる故郷を何ん〜て大きのまろよ
ちまて〜ぐ谷れ深ま世ゆで、中ちよろぐちる立ろ高ま
木ま遷りてろれ八ぐちぐしの枝葉をちげ〜ち多ぐ八〜さ
花をあろ住ひまを玉なまを實を八ぎ〜けて大きよつのつとの
れぐ〜大の〜ふ行ろふぐ〜のわの神ふわろくふろまよ鶯
行ま〜あぐまちれ車ぐろよ花ほ人の滝ぐちくし〜た
鳴ま〜彩ままぐで〜れ穂風よむひまさよ〜〜ま八十

いまは昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづのことに用ひけり。名は讃岐の造となむいひける。その竹の中に、本光る竹、一筋ありけり。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中、光りて、それ、竹の節を隔てて、よなよなは、竹を取りに、かの翁、竹を

我ハ

なるまのゝぬ都よ荒わびてのゝるゝ日もゝぬ秋をぞそる

硯の銘

そぐわゝや石のなめゝうしかゝるそのゝとゝ石なめゝうしかゝる
ハゝぐよ玉ゝふぐひゝゝ玉ハや硯ゝぐわゝふゝとゝゝ云
月なゝ秋ゝてゝゝゝ光れむなゝゝ田ゝゝゝゝぐゝもゝハ
ゝゝぐゝゝ硯ハや墨よ筆ハゝあゝせゝいゝゝゝれゝの
まゝゝゝゝゝゝゝ浸よ翁ふゝゝめゝ光ゝゝ
ゝわゝれいゝぐ玉のゝゝゝゝや云ぐ注ゝゝ硯ハゝぶゝゝ
生れて静なゝゝ硯ハ世ゝゝてゝぐふゝゝ墨やふゝゝあゝゝの

しゝゝゝぐゝゝ命も月よ日よゝゝゝゝれ松のれ思ゝゝ
ゝゝゝ三ゝゝわゝゝゝあゝゝせゝて八ゝゝゝれゝ千世万代の昔ゝゝ
ゝゝふゝゝゝゝゝの歌も松ゝのゝゝゝゝゝゝゝ

はれぐもまりくめ江よ採る八形の宵の西れつゝゝゝゝゝ
ぶゝゝゝ似ゝゝわゝゝ玉ゝゝゝゝゝ

ぶくれ渾身はゆ仏ゑわと八のうちれうるよくしぶるめ八あぐで
西より東よりわれ風をいうくぐぐぐ抱ふいひづぐくをよやう舌
うゆ涙まさくん口八龍のみくくよちれのいくしめくくぬ
げよ風ぶうよけバ滴干涙やまぐゆうくんよやの表れいと
ものしまーまふん土の墻の鼠とわぐろうくとあれ情
しくもうとむんなめて世よあうられくわうふようちの
ち木まれくゆめく浪のち屋わぐろくしーうぬなのー
ぐ井ちぐりわくくん叫ちあはれ市ちひづのわゆくよ
くぐゆのーしふうきくん人の詳を魚のやよひくられて抱え
くうのくもくくくくうゆれ分常遠のあれ仔ぐぐ境井ちぐ

うぬくくくちくくけくぐろ八くのくぐよあうくくゆうてくを
みれかいくもくーくゆなのめーくもうわくくくくくを我八く
くくで木表れりぐくくーを巻の絮ぐくれのむく雀くうくくあく
くく、抱れちくくくくうぐふぐうくくあうくゆ中ちなうゆぐ野
也れ松出をくねびき山寄れ夕べを告うくくわぐーかくくく
叫八ゆくくゆけう眠の友とかのわくくく牧よ抱わりひづぐくう
をもやめてんを注のくうくうくんぐぐく峯れ松風琴れ結よう
よひ笑のくよ沢の笛井よやくやまぐふ八野分吹立門くく
こむうゆふ笑りかのくぐうくくくせよ風を待風くくふりのくく
なのくぐ八ぐくく人のちづ也ぐのわくくうぐふけうくくく思

ふもだて物ぐるのーくんれひとの多ふるなん

枕の硯

盗人書をとゝゝを嵐硯を探ぐるをあやー我のーぬひ
まにぐ一つある硯を蓋ごとにわるそーハ人れもを
ぐよハめゝぐ神やなーめーんをハ光れてあぶゝ
きゝゝびやめてんゝ思ふを探いをめるのわゞひて
ハヌもゝとめゝゝを價ふをゝいゝぐを本ヌ光ーせー
を是ゝ神の焼ゝろぐきをせをゝんをーじめゝゝなる友を
枕辺ヌ行よて狩ハ風部ーめーゝをわをひをゝうわみな
ぐゝゝれん笑ゝをもちるゝ

じゞろ人のゝゝわてゝやせをゝをゝ六始ヌ人の十ヌのゝゝゞ
玉の夢なるを次て人ゝゝの物ー雪をれんをえゝ多をゝを
多てわとや我ヌを是ヌ物をを雪のヌを汚ハをゝめゝゝて
いヌ思ひをゝ市ぬるヌなわをて十ヌむけをゝをゝをゝぐゝ
ヌハ市のんゞゝふとゝゝゝゝゝゝゝ物のゝわゝゝめ月て
飛あゞゝなをんをていヌーゝ行ヌ行をれーやうヌて彼十
の題ゞゝわゝかいてゝねてゝゝをゝをゝをゝゝゝゞ十人のゝ
わゞゝやゝて取ゝをゝむゝをなーヌ机ヌけーヌたヌぬヌ人
あーゝゝゝゝ市てヌゝ栗ゝゞ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ろうけをゝゝゝゞ物市枕の硯ヌ弟のうんをんをゝゝゝゝ

つゆいとこまやかなれどなみだにぬれ
てはかなくもとけぬべきこころおも
ひつづけてよなよなぬめしもまれて
ありてあるべきせんすべもなくて必
し人は相ぜもすべてうやうなれん
むかし清原なる人のむすめの世をえぐれてさぶしき
ままにわがこころのなぐさめにとて祝のいつくしまにまゐり
まとのえらひたまふことなりけるにしのびやうしにて
ぎけゆくよおのづからめくしうぐわしのぞきたまふに
じょうみちの言ふる人をたちまちに年月おぼしおきわ
しらるべきなりけるどもおもひまづしのわらん紙のこぼれ

ぬいとづくにえもいはれぬさまにてかきつけたまへる
ほうしれ何のろくもなき紙のまことにびしうぞうつ
のいらるるあるとわくべきとりかくれゆくまくにてぞ
たまひけわかるるやうにはゆくえのひしさ先
わがゆくすえのいかにかくるるかはかりのおな
やうにてはいとあわびなくてかくれんち
梅がえにぞ永さぬぐいうちにとまるさくらん
生てのせをぶるのしくにぐ出なるやとのなかばとの
あるにはいかに流蓋のかれ碎流なるこの花れりの梅びぐひあ
らぐら思ふ秋の月はおぼえいつのごとやなる秋のあるひ

とゝ米して、立ちの〳〵ちゝびわごの、はめごひくうゝよのちゝ
ていひとゝぶもゝよごれとゝもあれ、ゆゝの義〳〵よ我とゝゝえ
ゝわとゝかゝわゝのれゝるもゝ、はのごまゝとゝのゝよハゝつゝ男ゝよ
ゝん、ゝゝゝゝう〜れ、ゝゝわゝゝゝ人ハあゝ仏ともはゝ〜いゝで
ゝゝぐゝ〜ぬ、はれ拝瀧をゝ滝わゝつゝ〜うゝだ、かゝくまで我をゝゝ
いなゝむハいゝうゝゝゝ〜〜バ、不平のゝゝよハ、おれゝ〜ゝてゝゝゝ
ゝゝゝひ〜ゝゝの米ひのゝゝゝのゝゝぬゝんゝゝわ者ゝ拍いゝゝぞ
ゝゝゝゝ〜〜ゝゝ〜ゝはもてゝゆゝ花ハ淫〜ゝゝゝゝわゝゝゝゝゝゝよ
ゝゝゝゝも、杖のあゝれ思ゝゝゝゝゝゝゝんゝれなゝ〜、
ゝゝ〜ゝわゝ〜ゝゝゝわゝゝゝあゝ〜ゝゝゝゝゝゝゝ

びちらさふらんしらぬよあいきれてめ海八世まのでら
まあのねをれバ世七日の音宝の表ハ代行ごのぶよ御桜
いくらくのよ捨て仕丁ハ桜垣の人やどわるまうぐめわをわ火
うきほくくしつ、ゆ宮あくもうう和うめんねわ出を
せかふ松あのしうを熙きせ、ん里うの海のぐ、左みぐ
ようしい皆わくくうくしうきぐわ宝をせまうう海うちど
も世まあや、うまかみくねをしをきうんまうふうふ
うまあもあくぐ形ん源やの軒ハ浜ぐゆうみぐわみれ涙
宮ふわくゆきうをえうひくあうわのんのわつぐひいうま
しうきうわのくきうふあハもし捨し祝ハいぐうまのうを

五八六

ひうくうう、うぐなま世まを在わびてこうのううめこいうく
の人もサひそうあぐ、し、

宮玄板

あうつくハきううきうて峯の私のひ、ぐ、あうあきし、樓
ぎうれうあし、ハえわもいちれぐハかひうなわ風うう
て花のきわくわくうれバ誉の去とく宮て校う
つわうきうきうはてゆふわ様ふ人の馬れとよ獣の愛を
えうひうまハ、ぐうぐ、家ぎまをまをうわていくうきむ
しふはくばくわれ雑まの一夢まハ用やうむん深ぎあまも
花多ぬひちくせしうきうのしなうまハ多ぐ、し、

右書曰

山ハ後河なるべし国のかみもたぐひなく高きと、夷の出入の、くるしきまでひすてゆゞしわ―をふゞ―の法師れうう要をつくして世よりぐめ―ん―の邦方よりハ枝れん考らるを、近江の人ハ法云尚る―云初こめてびきの―れ花見し人の日こそうゝ―あれ、我ちるまてハ武庫みさゝもろびえるちるれど、ゞの金我おもたるやうて月のうゝて―伊こゝ旅行ゆふよをもるゝ、東わるそれる夫、和人も、わが―なゞめるよ云ハうゝちるわゝ―のしるゝをぞなわ又是よりぐきて葛條やこゝろれ山ふゝるのこの著ゝを

あるよ、云日高きのゞ、常国之綸ちつ鎌、南かゝる廣むちゆ多むれ旅
ちゝこゝてゆ―れ―方ちゆ見ゆるを云、孫京のこやゝ人のゝみ
ゝわ―をわるゆ、

月ゝゝを八嘉ゝ―ゝをゝるゝもんゝハゝゝれぬ大和出ゝ、
之鞴ゆ別れ立出ちゝ出ゝ―ゝ―ゝる昔ゝゝて偽わ―ゆ、
ゆゞゝゝれちゞ―ゝ―ゝゝゆわゞ―いづ、　ちゝれちゝ我ち
ゝゝれ之ゝゝゆ、扨の糸ちゝ―ゝ逢ゝる受、

右書曰

之鞴川ハゝゝを川より流出て、末ハ法田の立野よりゝりて、
立田川とよひしを、今ハ大和川ゝゝゞれゝて河内の出入

てのたまのうきはは、紀伊の国なかつの川とかのうら、山城川波
さくのはしのもとにて、まづ難波にこそうちでの出雲なるべし、
けうとまして、ちさと流れたる野波のいさゝ川、絶ぬとなげてぬる
めるる夫、八重をちさゝふみのぼわゆゝしとやうれを流るるものゝ
ひて行なるゝ、むかしこゝをこそ人あわ、

たるまれ

あはれとゝめぐりあはしてゝと云花の父をのやうなるひとゝう
とて嵐のさゝみなびくるよりて何とゝ云性の業ぶとゝ人とも
あわゝのおはのゝ八雨のよのあるべて行とゝあらんとゝめ
らゝの物ゝとゝゝめるるのとゝ海田まれゝけんゝとゝる里ゝ

又八、うきはのゝもいとで、

たるまる

雨ふるのゝでも月八雲あるるよひしとゝよるゝ人のあく物れ
ゝのゝとのひゝ八里ひのいゝわゝのゝう社物れ、

右雲月

雲雀ゝと八鶯ゝ初とゝ清ゝ法ゝの八講のゝゝ飛ゝ法ゝの
ひゝねのゝとゝゝ東の杉ゝ下ゝ雪和のゝゝゝよゝゝゝゝ立
ぬとゝゝ多人ゝ文ゝ東大ゝの簡ゝ流の取ゝれひゝゝ和ゝ
ぼゝゝて底ゝゝゝゝゝ人、難波私のゝゝ民のゝ
て流れゝゝ伏見の庭ゝ花ゝ八四のゝ

[illegible]

なびてさかりなる方のゆの[illegible]立て見るにぞ、[illegible]

く咲きそめしかの[illegible]やとりかなどとかわて咲くうち

ハ杉のかどまもの一男ひ出るとをくさぐとよハあるぬど、

[illegible]れば[illegible]の[illegible]波風をうて花の林よりふかうう

花盛

あらそしく風よりちる花なれよ爰ハいふよりも行恒

の[illegible]よりやものごとくん、年ごゆる和れ翁家のかゝひの集や

いめれうき榜[illegible]ぶ[illegible]さてもとゞまれば後[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

美雪

[illegible]野のすめ[illegible]やうと為[illegible]つむ人

美水

[illegible]の井[illegible]

春風

めぐるかの枝よりかぐめる美風の[illegible]野の[illegible]

美野

[illegible]義[illegible]の[illegible]物[illegible]

美江

[illegible]

美行

[illegible]花[illegible]の[illegible]その後[illegible]

美成

いきつれ[illegible]戸をとりて花の[illegible]

春宗

[illegible]の影をいつ[illegible]

[illegible]の笛[illegible]人[illegible]

慶舟覩　此云不世　賀大

[illegible]章者、盍神代[illegible]遠[illegible]也、慶[illegible]見[illegible]月令及古

[illegible]記播磨風土記[illegible]用文[illegible]笛[illegible]慶西[illegible]不[illegible]盍也、訓

不世賀大、因二摂津風土記一云、

雨のうた

うれ月つゆりわすれぬ、むらるつゆ日落とかまて、秋の初
風そゝ〻まあ〻しゝ、里の人みな〻わひ巣ゆうんるゝ
びつ〻、ゆやどわ我もうゝしの何ゝの夢ゝるゝぞ〻て、八
びとあつまわ、ひとゆゝひめゝて、極びのゝじゝるゝ、
でんゝいの花ゝあゝて、てん、うれいゝゝ、ゝるゝ也とて、
ゝゝゝじ花ゝめゝわなゝ、義ゝ、ゝゝぞつ、校ゝゝめ聚ゝゝの
しゝなゝて、是親ゝめゝ、ゝゝゝゝゝゝゆゝ極びなゝゝわ、其ゝゝ
ゝゝゆゝ、夜秋のけゝめゝゝゝのゝゝ、ゝゝゝゝゝゝゝ、

ゝしのおやれゝとゝゝゝゝゝてぬゝれユゝゝゝゝゝとのい
ゝ男ゝひゝゝゝはゝほゝひゝゝゝゝあれ、ゝ秋ゝゝれゝゝゝゝゝ
びゝめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ蟻の片ふ
ゝゝゝゝゝゝの、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もゝの中よりわなのびうるまるがひろうをぞよみうるそし
ハ秋の末うん九月の時ぞ　つゞくゝわしを後撰
集にしれの記なもいうられうめくをぞゝうまぶを秋
よ出めど秋ふわて人よねまうん秋の野末のあられ忘
んやハをうれめしをもめせる栗れめしをゝ云ハみ宮めのゝ
ゝうて何葉の紅れ時よ黄なうハ蒸栗よ仰ゝわうをゝうを
の帥めいをせるひし宮よ栗ハむをぞを黄なるを菊ハ
唐なるよをうふ花岳よハよるねど花やちう秋の時ゝ
めでうを九しをもいつぞうれハ唐ものをうをひよてをうをも
秋のみ秋の蔵者ようぶへるぶをよ仰ぬまのいをゝれ神

まううをぞのわうのうハをしよ代よわをうんよめゝ萩の花
の今を搗をわをぬゝひうやをわぶをうをゝぞハハ
まし　つよわめで仰せをうまつよて受にハよめをと星ぶのさわ
なうをもをまをよわおをん撞どれ花を云名ハ宮内の巣
つをうをくみ萩をわつをを受ぶやしふよやわひ出をんをる
ハ出をぶゝハ植ものぶよををはひ彩わをさ狩千をう
うをを扇を云名物よ名をうを見ぶ星よをバぬををを云
をぶ古を知のいをれし濡れ言寝を云人蓋時の雲をなゝ車
よ後て走れまうわりをを云光をわびをう粥をも
老てをうをふをよ八野なる言玉をを星をを田のれど狩

千里と西は幸ひとりて八月のうるはしき
月をあはれんで行るゝ夕の色ぞいとゆゑ
花の夕雲なきまでもとしわたるこゝろ
浪華のくろこゝゆるゝ夕べ
くもちよりわるひとみけ
神代もかゝるみよの
八月ごろ
きゝうぬるわるぬ
ひめのなん
ざわ出てけ

の千町八ろくとちぬ
特わのそ
おつ
よろこ
なりめ

秋

梅
はち
ろ
よ

秋夜

ぬ秋の夕
ぬ秋なれ
人
月
ぬ
ぬ
ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

引、森のいとうあんやる、銭とめにのづけ、星さき笹の
ゑこうろうろん、中こうろ、年ゐやこで雪ゆくべ
よを人うよわ思へぐ、ちりこ秋井ふわてをいなるれんあこよ
しの世やなぐ、れのぐぐちこ、いひあへなげくあこ叫、こ
ぬぐよをこう、いこうむきこうらぼん年こぐこをどわて梅ぶ
こん、れの祭よハ相めこぐわここんなど星こちるめこて
御こん、歌ゑまるのここるよぐみここの人ぐこなしバ、
いひごハ神を飛ゆこ、俳ぐこるあれこるこぐゑまん
りれぐ、こぐし幾の神ぐこのわハ蛍をつこごとうこゑまち
ぬ人のいどなりこわ、

右寛政十年の夜五月廿五日のわうの月のつごりわ方よ
でのうをとゆこれこるる峰ん尼よ笠うこゑしふ霧の
記ここゆる雲出せし世月れこくやみてこるこわここ河
内れは下の星れ、正法ちこ下これちるやどわ、てあわ、
叫のここるわ、

雅孝記

人の世よあこれ、たうこ手紙のこれの、こを祈めてこちここ
とかこめぐ、てゆうのこう、雨れけぢあハ、あれどハ二
つハ作よいこぐこるなのわけこれ祝よつのふこここの
いやこく、こを思ふこハあで、祝のこと人こうこれこちを

しも拾ひ受びて行ものふと庭のそーつをうごかしてはと
むらあわ又受ごと受ど忘ばうわをたゞのちーごとろる人
のふとさよをとく世ものんやハいとこゝしま人のまれまぶあ
けをめぞーなるほどのわ逢ぶ袖をんやまもあくどいとく
強よ志をてつふふうこの寝れまとくろ男ひしまやう
しかまるで帝ゆくまこうもとゞまゆろぬハいつろり
求立けんいとのぶーうもろあれつのと位ろまこんを
八御祝えのおよ冠をゆーうとろくろひゆめたゞのちーと
かしこみまんだ御ろの鳥わハいうれとまゆろ流れどあろ
さわよ富人のるも是よなーひてのーあれれハ世よゆろぬ

五ノ二十八

るゆ今れ世ゞるわよ人のゆろー都六條わるよ馬場の何ものと
云人兄の病ひしてちのれのわーことまつまてつるふろの
御いとゞるまるわ毎二人兄のまれとこれさろれて市よ流れ
るわーに祝をのーつろこれーまをらをーむをめんをある
まれ人のまるて祈かやけれみこのまーたうん生んるま
を吾ちろせーよあれるのーまの祝よつるるをほろれと
せんこと、つとも恥あること世我ハあのこまよまるろあえ
を、まれてあ立せるうんよ何とのまこと人まるゞまるうと人
却れぬまるるとて毎城おひとをかまゞゆをこして祝まるれ
いつちくるゆ出ちんとえ家ゆ一洋の人こあるてまゞひうく

ゝのこゝろざしをうけがつてうゑのゝ母まうぬ今
ハ昔の行ゑをうゝとなれ家をたゝきまうかやゝ又
我孫彼のかゝと人の母一人を兄はゝ妹ゝゝら三人ゝ
しづまて兄ハ起ゆくゝゝ妹ゝゝゝ三人ゝ
出まて祝まうゝまうゝゝゝやわんとてゆうゝ出ゝらゝゝと
ハ人の表なゝんとゝうゝゝ母のゝゝゝ

さてこれよりのち、さくしの使ども、みな生きて、黄
ごん日ねをかくめるとらのとしの今、
の立ちわて、綱豊訪ごろせど、ふつと財宝をも何ともせん、
この時ちゝ八せの人れ仲よまわ、物なるぞやとこ、ばそ
の名まこそちゝえどよを伝ひ上世わをるれ是を
納めていのぐうわの死をとむ、ちれん祝の唐男、ぬなわい
と恐ろしきよう人をぐとてつゝめうまあと投あるぬ、
ちゝこかろれ、のしこみ泣わびぬるや、れこ人のるわし
まこのれぐ、まと偽ハちねぐ者ぐでもうふるを人
もあわけし、逆れ訓をちを文弟まれわこをみ一人のうゝ

そしぐれそれかれ外ハぬハなぐこしのの浅ぬ云ふ宮の仏
よなぐれぐわて、詰をつとめねぐ、れるを言ふれ
て、ゆうづけ、石を統よをちをせてるれ代をを国よひぐをふ
といこゝこと上よつわぐ、ふれん仰ら伊豫の出今治の民
矢野茂父ちの八、六十諭ちさで毋刀自よつふまつわ十七れ一
つをたぐそしと約れつをを、のをたふれてをろのねあま
つをまひ、且西のいまのしめとゆうぐ、縁ちをとを祝ると
もにゆうををせしを縁遠ろ邦よを、中言河保茶ちを人を
う色皆川の翁よ詰てつぐこゝよをちをを、國よ踏わしかの人まを
よをこをとをををこよを、つ人て歌ちゝ我ちの人をお見

ぞ、是皆川ぶまちをとしるす、夏びおぢてあ〜ぞをわれば世の
宮れるの、六十こゆることぞ、掃のうぞをわ〜〜ことを義こつぐ
まりのよ世ぐるもわぐも一こつ出こ踏わ伝ら生、面ようよ
おて宰飯は母二つ、さこれるそいとをびはして面をぐいん
知ぞあ〜ぐ浅の母八今已よ十四夏のひ〜人ようあわぬい
まぐうわ一呼八日を義ら〜ぐ心を寝ぐうわもこ〜ぐ大方
のよぐも御四よ〜ぐびて童さ義のうむわ〜りのいみぐよ
八のうくを見ふよそ乳月かぬ浮ぞれをとゆ〜ぬこ見
をのこつぐこ〜こ〜ぐ〜ぬこ〜ぬ〜れを形ぐよ、いの八千度
ゆひなこ〜こ〜れん伝ら生の父の父尚ぬこ〜八面ぶわの義さよ

みて既ぞれ〜こゆ父の好めぐ〜ぬ也とて次で家ぐ〜ぬ若
の偏ぞれ生我ぬおよもぬを伝ら〜わぐ〜八れど父母の慈れ
訓ぐよあ〜ぬよそ紙ぐ〜こて是とぐ〜ぐ〜ぐるひと
つぐりわけわぞ〜八何のつ〜ぐ〜なる石をかぬ〜めんぞぐ
悪いぞ〜祝のうこれぐ〜ぬなれば為ぬ〜ぬぐ〜出い父石
八義伯称八巻二帝、父尚ぬ伯称八丹無安形七四歌六十文ぞて
世ぞ〜ぬ母ぞ〜雇田氏ぞ〜ぬ影八十文いぞ〜ぬ世よ〜ぐ〜ぐ
う〜わぞ〜ぬん伝ら生、河辺の松三四三月ぐ〜ぬ

つ〜ら弟みず又